

# 戸坂潤の啓蒙論とジャーナリズム

——言論の方法と効用について——

## 要 旨

戸坂潤の一九三〇年代半ばにおける評論活動は、その評論活動自体についての方法と効用意識の明確さにおいても注目されるものであった。彼の総合雑誌を主たる舞台とする評論活動が、ジャーナリズム論という反省された言論の方法と効用意識と並行し、それに支えられていたということは、顕著なことからであった。

小稿は、戸坂潤のこの時期の評論が具体的に何を対象とし、どのような批評を加えたかという評論の具体的分析を試みようとするのではなく、関心の位相を右の点に限定しているものである。

そこでは、所謂「人民戦線」論の実質上指示する領域が、戸坂潤によって「理論的ジャーナリズム」と呼ばれた他ならぬ総合雑誌ジャーナリズムの世界であることが摘示される。

「殿軍の将」とも評される戸坂潤のオルガナイザーとしての評価についてここでは何もつけ加える用意はない。ただ政治的、思想的な壊滅、壊走状況の中で、こうしたジャーナリズム論、又はジャーナリズムに対する依拠の仕方には、それに対応する歴史的な系譜が回想されている、といつてよい。

戸坂潤のジャーナリズム論は、そうした位相における史的な総括といふべき基本的特性あるいは歴史的特性を有していると考えられる。

高 木 喜 孝

## 一、啓蒙論 —— 戦備的な教養

戸坂潤のジャーナリズムにおける評論活動は、周知のように自ら端的明瞭に表明する言論の方法・効用意識によって位置づけられた系統的で目的意識的な政治的文化活動であった。

政治組織方針の次元におけるコミンテルンの人民戦線戦術に対する忠実、といったことをここで強調しようということではない。独特の意義を与えられた「啓蒙」論が表明する言論の方法・効用意識の方に着目し、これを考えてみようというのである。戸坂潤のジャーナリズム理論として「新聞現象の分析——イデオロギー論による計画図」などが想起されてもよいが、その本領が具体的な状況の中における実践的な言論の方法・効用意識の表現であることはくり返し強調されてよい。

「歴史上の所謂「啓蒙」の二つの規定から来る啓蒙の二つの制限（悟性、の哲学と理性の哲学）（即ち形而上学と絶対的観念論）を踏み越えて、啓蒙というものの本来に自由なそして本当に合理的な意義を、現在、歴史的に惹き出すなら、その内容は結局、弁証法的唯物論だったということになる。」（「啓蒙論」）戸坂潤の「弁証法的唯物論」が、その内容・体系においてスターリン・ミーチンのなそれ（スターリン『弁証法的唯物論と史的唯物論』）と如何に異なるかということはここでの主題ではない。戸坂の「啓蒙」の内容が、結局のところ、歴史的な啓蒙（たとえば、E・カッシーラー『啓蒙主義の哲学』風の史的系譜付けを想起）とは遠く離れて実質上

「弁証法的唯物論」のことである、そのことをまず確認しておく。「啓蒙」という言葉に明らかに付着しているその史的なイメージに半ば依拠しながら、かならずしも段階論的な方法上の特性が前面にでるのではなく、結局のところ史的なイメージを払拭してしまうところにむしろ力点がかかってしまうといった流れをみておけば、ここではよい。

「啓蒙」の特性、その言論の方法・効用意識の表明としての特性は、次のように与えられる。

「——啓蒙活動の実際的な形態を取って見れば、夫は専ら文筆言論活動なのであるが、啓蒙は之によって出来るだけ多数の大衆を動かすことが必要であることは当りまえだ。そう考える限り、啓蒙を政治的言論活動から区別するものは一寸ないようにも見える。だが、今特に政治的機能を特色とする大衆的言論の諸形態を並べて見ると、オルガニザションの次に、アジテーション、それからプロパガンダという系列となるだろう。レーニンによれば、プロパガンダは百人を目安として物を考えることであり、アジテーションは数万人を、之に対してオルガニザトルやレヴォルチヨンスフューラーは数百万人大衆を、目安として物を考えねばならぬという。その際プロパガンダはアジテーションに較べて遙かに原則的であり、後者の戦術的、スローガン、を前者は戦術的分析にまで結びつけるものと云われている。で、プロパガンダはアジテーションより、そして、アジテーションはオルガニザションより、より原則的であり、即ち又時局の時々刻々のアクチュアリティからそれだけ離れていることになる。処で啓蒙はプロパガンダにも増して、この意味に於て、より

原則的であり、従って又それだけ非時局的なので、アジテーションが戦術的スローガンを、プロパガンダが戦略的分析を、内容とするなら、啓蒙は云わば戦、備、的、教、養、を内容とするとも云うことが出来よう。従って之はそれだけ一応、戦場的な意味での政治的特色を減じる事となる。啓蒙はオルガニザチオンやアジテーションにも増して、多数大衆を対象とする筈だが、それにも拘らずその内容は、プロパガンダ以上に原則的であり非時局的なのだ。啓蒙がプロパガンダ・アジテーション・オルガニザチオン等々の系列に横たわる政治的、言論活動と異って、所謂純文化活動なる所以が之だ。<sup>(3)</sup>

あくまで「戦、備、的、教、養」を内容とするのであって、その点で一般的な「教育とかポピュラリゼーションとか其の他其の他というもの」に帰すものではないという戸坂の補足はもういいだろう。実体としては、いうまでもなく、まず唯物論研究会を拠点とする言論活動が想い起されよう。『唯物論研究』誌、そして「唯物論全書」。「啓蒙」は「プロパガンダ・アジテーション・オルガニザチオン等々の系列に横たわる政治的言論活動」とは別系の言論活動系列として位置づけられている。

「プロパガンダ・アジテーション・オルガニザチオン等々の系列に横たわる政治的言論活動」が、言論の場の状況として非合法化されているのは、ここでは所与の条件である。その系列の言論が敢然遂行されるのは非合法の下においてであって、それは元々戸坂潤とは別に、彼を超えたところでなされる。表面上は隠れがちなこの枠組みは、敢然とし、かつ基本的なものであって、全体を枠づけている。

「そして今日一切の社会的デマゴギーは結局に於てファシシヨ的言論へ統一されて行きつつある。ヒトラーは一九三六年秋ニュルンベルグのナチ大会で、ボルシェヴィズムはユダヤ人のものであるが故に之を打倒せねばならぬと「獅子吼」したそうだが、こうしたものが一九三六年度の世界的デマゴギーの特徴をなすだろう。ではこうしたファシスト・デマゴギー（その背後にはファシスト的社会・政治活動の一連が控えている——例えば国家は資本家ではない、国立の工場では労資の区別はない、そこでは対資本家の労働組合は不合理だ、等々）、に對抗する唯一のものが、最上のもものが、日本では啓蒙なのか。日本では民衆の利害のためのプロパガンダは許されないか、人民の利害についてのアジテーションは許されないか、人民のオルガニザチオンは許されないか。——私は今ここで、こうした政治上の見解に触れることは出来ぬ。<sup>(4)</sup>

戸坂潤は当時の合法的なジャーナリズムにおける言論活動についてまづ限定的に述べているのであり、その上でそれに状況からの制約以上の、言論活動としての独自の積極的な意義を与えようとしているのである。

「ファシズム反対の広汎な民衆のフロントが問題になる時、この一応非政治的で純文化的な政治的文化活動こそ、その処を得て最も有効に活躍し得る時であり又しなければならぬ時でもあると考えられる。フロンポピュレールの活動に於て、例えばフランスのように（又わが国の場合では往々批難さえされている処だが）、文化運動の意義の重大さが特に認められていることは、理由があるのである。処が今日までわが国に於ける啓

蒙活動は、決して目的意識的ではなかった。事実の問題としては相当の啓蒙的実績は挙げているのであり、例えばプロレタリア文学などが果した啓蒙的效果は絶大なものであったが、それすらが実は啓蒙活動という自覚の下に行なわれたのではなくて、啓蒙的效果は云わば思わぬ収穫として残ったというまでだ。その理由はさし当り、啓蒙という觀念の有っているその政治的特色とそれの一応の非政治的純文化的特色とのからみ合いがリアリティックに的確に把握されていなかったことにより、

又幸か不幸か、今日までそういうリアリティックな把握を強制されるような情勢に立つことがなかったということにあるのである。——今日啓蒙という特殊の文化活動の様式が、プロパガンダ(宣伝)やアジテーションその他と併んで、独自の社会的意義を公認され得る条件を備えており、従って又この社会的意義を活用し得又活用しなければならぬ時期でもあるようだ。各種のジャーナリズム機構(独りプロレタリア・ジャーナリズムに限らずブルジョア・ジャーナリズムさえ)の意識的活用其他が、啓蒙活動に固有な様式となる。今日所謂「合法的出版物」(その意味は現在極めて曖昧であるが)なるものの意味の重大性はここにあるだろう。比較的に原則的な又或る限度までしか時事的でない啓蒙活動の、素材及至内容は、この様式の下にあっても相当運用の効果を挙げることが出来るだろうと考える。<sup>(5)</sup>

戸坂は「ブルジョア・ジャーナリズムさえ」という表現をするが、この脈絡からは、むしろ商業ジャーナリズムにおける言論活動の方が、「啓蒙」の特性をより鮮明にするともいえる。非合法的言論活動、ある

いはその合法・非合法の一線が極めて曖昧であるゆえ準非合法ともいべき不安定な状況の中にある言論活動では、遙かに及ばない広汎な言論の場が、そこには開かれてあるように見える。戸坂の「啓蒙」はこの点に固執する。そしてその固執は、彼がいう「プロパガンダ・アジテーション・オルガニザション等々の系列に横たわる政治的言論活動」の従前の方法に対する批判も下敷にしていたといえよう。

「だが大衆というカテゴリーも亦、極めて多くの問題を含んでいて、簡単には使えない点で有名である。少なくともキング式觀念(「大衆」雑誌や「大衆」小説)とウルトラ的觀念(プロレタリアだけが本當の大衆であるという類の)との対極があるが、どれも困る。前者は大衆が質的に低いものだと決めてかかることによって事実大衆を低める効果を有しているし、後者は大衆の質的な高さを仮定することによって大衆が多衆であるという量的規定を忘れて了っている。大衆の社会科学的觀念は、大衆の質を高め、ことから離れてはあり得なかつた筈なのに、処で大衆及至大衆性に就いてのこの種の規定方が、ジャーナリズムの機能の規定方となつて来るのである。キング式大衆の觀念はキング式ジャーナリズム(野間イズム?)となり、ウルトラ的な大衆觀念は福本イズム(?)的ジャーナリズムとなるのである。」<sup>(6)</sup>

例えば、G・ルカーチの『歴史と階級意識』が、「世界革命」の告知の書であるとともに、何よりも西欧ブルジョア・インテリゲンツィアの自己批判の書であるものが、その前提たるべき学の体系、オーソドキシの極めて薄弱及至元来ないところで逆にそれがテキストとして読まれ

る、という類のことから。否、そこまで詳しく入り込まなくとも、言論における方法・効用意識そのものの著しい希薄及至欠缺——戸坂が「ウルトラ」と呼んでいるものは、逆にいえば前提として予め自己と同質的な言論圏を予想しそこで終始するものであったろう。それも半ば以上無意識にである。戸坂の批判は、したがって量という規定の次元にとどまれない。「啓蒙」において彼が「目的意識的」というのは、まず原初的には自己と同質的ではない言論の場に臨むという方法・効用意識なのである。レトリック、というと又別のイメージが付いてくるが、そういってもまあ、良い。彼方では「常識」であるものが此方では常識的ではなく、彼方では説明不要の前提であるたしかな情熱、問題、目標が、此方ではこれから呼び起され、あれこれと指し示されなければならない。もっとも戸坂は、諸「常識」がばらばらに行なわれ、その上に諸々の言論の場がほとんどアナーキーに存在しているという像を画いているのではない。「常識」は、戸坂にあっては「常識水準」として層を成し、運動性を有している。

「之は単にいくつもの別々の流儀の常識内容がこの世の中に並行して行なわれているからではなくて、「常識」なるもの自身がパラドキシカルな存在だからで、即ち常識なるものには、いくつもの常識水準があるということを告げているのだ。」<sup>(8)</sup>

具体的に挙げられるのは、「イギリス風の原生的常識」、「近代的・合理主義の常識」、そして「マルクス主義的弁証法(唯物論)」の三層である。これらの「常識」の各層を媒介し、戸坂の表現では「交易」するのが彼

の言論の位置であり、とりわけ前二者と後者との媒介、「交易」が基軸となる。「交易」というのは、前段階の水準の上で、後者への路を指し示そうという契機と、後者を前二者の基盤の上に確立させようという契機の双方を表現しているのである。<sup>(9)</sup>

戸坂の「啓蒙」が、むしろ商業ジャーナリズムにおいてこそより一層その特性を露わにする、といったのもこのことである。但し、彼は別段『キング』を舞台にしようというのではない。『改造』、『経済往来』及びその継承誌『日本評論』、さらに『中央公論』、『文芸春秋』——一九三四年、三五年以来の言論活動の実際は、『唯物論研究』の他これら所謂総合雑誌を主舞台とするものである。

状況からの制約——それには一九三四年に思想不隠のかどで法政大学を免職になり、もっぱら著述で生計を立てねばならなくなったという私的な経済生活上の状況も含めてもよいが——もあるが、それ以上に戸坂は「啓蒙」を、「プロバガンダ・アジテーション・オルガニゼーション等々の系列に横たわる政治的言論活動」とは別系の言論活動系列として確定し、独自の社会的意義を、公認(いうまでもなく政治組織方針の中で)させようとする、これが彼の「啓蒙」論の眼目であった。

彼の「啓蒙」が、『思想と風俗』や『思想としての文学』に集約されているように、「日常性の原理」からする風俗批評を展開させ、或いは文学批評を展開させ、日常性や風俗という「一身上の問題」での共鳴を以て、進行する思想動員と拮抗しようとしたその詳しい実際には、この小稿では立ち入ることはできない。<sup>(10)</sup>ここでは、「啓蒙」が元来の守備範

冊として、「戦備的教養」に関する独自の言論活動を以て自ら任じ、又これに待むところありとしたことを確認し、次にそのことと戸坂の人民戦線論との関係をもう少し詳しくみていくことにする。

#### 註

- (1) 初期の空間論の系譜と区別される主として時事的な評論活動を指す。時的には、後述されるようにいわゆる「大転向」(一九三三年)及び「左翼文化運動解体の年」(一九三四年)以後、『唯物論研究』誌上の評論も含まれるが、本稿の主題は、総合雑誌を舞台とする評論活動において一層はつきりする。

なお、戸坂潤の啓蒙論とジャーナリズムという主題に関して先行する二拙稿がある。「啓蒙」運動組織論としてのジャーナリズム論——戸坂潤の媒介カテゴリーの展開について(『季刊ジャーナリズム論文研究』No.1)、『戸坂潤の言論の型と主体の構造——後期評論について』(同前、No.3)。本稿は直接には後者を継承するものである。

- (2) 「啓蒙論」(『日本イデオロギー論』一九三五年所収)『戸坂潤全集』第二巻二七一—二頁。
- (3) 「教育と啓蒙」(『思想と風俗』一九三六年所収)『戸坂潤全集』第四巻三三九—三四〇頁。
- (4) 同前、三四一頁。
- (5) 同前、三四一—三四二頁。
- (6) 「ジャーナリズム三題」(一九三六年、『世界の一環としての日本』所収)『戸坂潤全集』第五巻一二七—八頁。
- (7) ヘーゲル・カテゴリー、たとえば“Totalität”を用いてはいるが、その本性はより端的な目撃と告知であるということ。『歴史と階級意識』に先行するハンガリー革命の過程ではこの性格は一層鮮明である。『ルカーチ初期著作集 政治編I』(合同出版)参照。
- (8) 「常識・合理主義・弁証法」(一九三四年、『思想としての文学』所収)

『戸坂潤全集』第四巻一三二頁。

- (9) 先行する戸坂の常識論にくくにつけ加えるべきことではないが、近時の言い方では「パラダイム」(T・クーン『科学革命の構造』)ということを目指してよい。

但し、常に重要なことは、疎遠な過去についてのたんなる説明の手法としてではなく、未来に対する働きかけの手法としての意義であろう。自分、及び自分の属する仲間集団の習慣や「パラダイム」ほど、習慣や「パラダイム」から見透しがたいものはないというパラドキシカルな関係が、そこにはある。

- (10) 前出「戸坂潤の言論の型と主体の構造——後期評論について」は、評論活動の実際を素描している。

#### 二、人民戦線論——「戦備」の前線化

戸坂は、「啓蒙」としての言論活動は「戦備的教養」に関わるものとした。「プロパガンダ・アジェンション・オルガニゼーション等々の系列に横たわる政治的言論活動」に対して別系列の、独自の社会的意義を有つものとされたが、その守備範囲は、「戦備」と喩えられ性格づけられていたのである。「戦備」ということから後は後にみるようにさまざまなニュアンスを読みとりうるだろうが、ともかく「前線」でないことだけは確かである。

「戦備」という自己規定は、非合法の共産党の組織実体は別としても、プロレタリア科学研究所・『プロレタリア科学』や産業労働調査所・『インタナショナル』、『産業労働時報』がなお苦闘しながらも健在な段階で

あれば、まだしも実体的な根拠を有しえたのである。しかし、いわゆる「大転向」を画期として、強力な弾圧の下にそれらの諸活動が次々に壊滅せしめられ、沈黙せしめられていくと、客観的な位置の方が自己規定とは全く別には非もなく大きく変化していく。「左翼文化運動解体の年」といわれる一九三四年の後では、「戦備」という位置づけは如何にも実体的根拠を薄弱にし、あるいは失なうことになるようにみえるのだ。全体的な「戦線」が壊滅、壊走しつつある中で、その「戦線」の存在を大前提とする「戦備」というのは、如何にも名にふさわしくない。つまりこうした喩えでいえば、本来「戦備」的な自己規定で起動せしめられ、又その位置に関して実体的根拠を有していたものが、端的にいつて是非もなく、「前線」化してしまうのである。自己規定が原則的に変らなかつたにせよ、客観的な、関係的な位置の方が、周囲が変ってしまうことで自己規定の実体的根拠を変え、又はなくしてしまう。

戸坂の「啓蒙」論は、その上で、「戦備的教養」に関するという自己規定を敢えて、確固とさせてたのである。

したがって、この敢えてというニュアンスについて、「前線」そのものの直接的な再建という次元とは区別されたところで、限定された別の効用への志向をみてとることは十分可能であろう。<sup>(1)</sup>つまり、あくまで喩えの字義通りに「戦備的教養」の次元に限定して、「前線」の壊滅・壊走の唯中において思想としてのマルクス主義だけは延命させようという意向等々のことである。これはかならずしも保存という消極的な側面からだけではなく、後退の中での思想展開・深化という側面からも把えら

る。第一章でみたかぎりでも「福本主義」批判の脈絡や、「啓蒙」の政治的言論活動系列における相対的な独自性の主張のあり方は、むしろこの後退の中でこそ、確定させておくことができるという含みを十分に読みとりうるものであろう。又、思想としてのマルクス主義の延命という志向には、不可避的に「転向」の思想的克服という問題が入り込んでざるを得ないだろう。しかし本稿では、戸坂潤の心事、心象風景に直接立ち入ることはできないし、それがここでの主題の展開に不可欠なスプリング・ボードでもない。——「戦備的教養」に関わるとされた「啓蒙」が、人民戦線の名の下に位置づけられるとき、表現される喩えの上にすでに現われている実体的根拠との齟齬に我々は目を集中していく。

「併しアチラの人民戦線を眼で見た河野氏は、この言葉に対して特別な注文を有っている。フランスやスペインのように、少なくとも複雑な小政党対立の関係がある時に限って、氏は人民戦線という言葉を使うことを許可するものであるらしい。之は麻生久氏などの観念の内にもあることで、日本でも既成政党がいくつかに分裂した場合でなければ人民戦線などは出来る理由はない、と考えている。如何にも代議士らしい人民戦線の観念であるが、之によると人民戦線とは、専ら政党運動や内閣組織活動につきるものであるように感じられて来るのである。<sup>(2)</sup>」

河野密や麻生久の人民戦線観念そのものにはここでは関心はない。一九三五年、コミンテルン第七回大会が採択した人民戦線戦術は、その根にヨーロッパ社会民主主義運動の蓄積を有していることは周知のことである。選挙政党の次元だけではなく、蓄積というのはむしろより基礎的

な労働運動の次元においてというべきであるかもしれない。コミンテルンの「世界革命」の理念にとって、この社会民主主義運動の史的蓄積は、一九二〇年代を通じてそこから飛躍するべき当の対象であり、逆説的にいえば史的な発条であつたろう。それが結局「スフィンクスの謎」に帰すことになるにせよ、それらはあくまで蓄積された労働運動および政党組織の実勢力の水準の上で演じられるのである。つまり端的にいて、人民戦線に関しては、政治権力の実際の掌握ということが本来そこで直接賭けられていることがらであつた。ヨーロッパ・プロレタリアートの巨大な分裂と反ファシズムによる暫時の修復。しかし、コミンテルン次元での人民戦線戦術の採択においては、世界普遍の政治組織方針として、否ヨーロッパ全体に普遍的なものとしても、そうした現実の史的根拠をそのままどこにも見出し出すことができるものでは、元来ない。史的根拠を欠くところでは、どうなるのか。

「私は考える、日本に於ては日本特有の形と日本特有な言葉の意味に於ける人民戦線なるものが必要であり、その動きは及至それへの動きは、歴然たる事実に属するだろうと。この必然性を認識する点になると、軍部型ファシストともいべき赤松克麿氏の方が、却て要点をつかんでいるのではないだろうか。氏によると、人民戦線は日本では大變に必然性を有っているから、それ故に予め之をやつて了うことが軍国焦眉の急たのである。だが日本で人民戦線というのは、群小諸政党の最低綱領による反ファシヨ的共同戦線というようなことを意味するより先に、とに角、人民の反ファシヨ戦線の成立ということ在意

味するだけで、立派に意義があるのだということに注意しなければならぬ。とに角といわねばならぬ程、日本における特有なファシズムの攻勢は急迫しているのである。之が日本型ファシズムの「特殊事情」であり、従つて之に対抗するだろうものとしての日本型人民戦線の特殊事情なのだ。いつて見れば之はより未展開なその意味でより一般的な形における反ファシヨ運動なのである。」

第二インターナショナル以来の社会民主主義の系譜上にある選挙政党や労働組合勢力を恃むというわけにはいかない。そこで戸坂はレトリカルにいう。「日本における人民戦術は社会大衆党そのものだ」と。戸坂は諧謔を弄ばない。ここでも、大いに生真面なレトリックがあるのである。

「日本の人民戦線は今云つたように、より一般的な形態を有っているのだから、例えば社会大衆党のただ一党を以てしても、と云うのは即ち、社大党以外の大衆的政党の存在や又は既成のブルジョア政党の大量的小分派への分裂などを俟つことなしにも立派に人民戦線の活動の任務を遂行することが出来る、と云つていい理由があるだろう。日本ファシズム反対の人民的任務を果すことが出来ると云つていいだろう。菊川忠雄氏が引用する文章に従えば、日本における人民戦線は社会大衆党そのものだといふのであるが、このやや奇矯な言葉にもこういう風に考えれば意味があるだろう。」

だから「もし人民戦線という言葉が気に入らないならば名前は何でもよい」のである。名前だけではない。コミンテルンの採択した具体的な



「人民戦線戦術」の規定性はもうずっと後方に退っている。

戸坂は、「とに角反ファッショ的戦線の確立」の為に、さらにこうもいう。

「ボヤボヤしていると民衆は攫われて行くのである。一旦攫われたら当分帰って来る望みは、まずない。かの勢力の強引な牽引力に打ち勝つことの出来ない民衆をして、その牽引力の一応の支配下にも拘らずなおかつ自主的な結合のプログラムを進め得させるために、社大党は一定のお膳立てをしなければならぬだろう。そうでなければ、民衆は心ならずも、大衆政党を断念しなければならなくなる。だから重ねて云うと、今日唯一の可能な実際方針は、一面に於て民衆牽引勢力によって牽引される民衆に足場を提供することであり、他面に於て、この足場そのものから民衆結合のプログラムを打ち立てることだ。之を悪意に解釈すれば、一面追隨他面対抗という「擬装」だと批評することが出来るが、併しこの擬装が現代に於て大きな真実を持っていることを認めない民衆は、ないだろう。「社大党ファッション化」の現実には、この根本的なそして客観的な存在意義に基いて、発生する諸徴候だったのである。その真実性のあるものと愚劣極まるものとを含めて。」<sup>(6)</sup>

「社大党はファッショ化したか？」という戸坂のここでのレトリックの運び、動きよりも、もっと大枠の次元において、政党の次元での「人民戦線」というべきものが、「社大党はファッショ化したか？」という問いにおいて造形されるという水準<sup>(7)</sup>。簡単にいえば、なお政党の次元以前の段階であることが、ここでは表明されていると云ってよい。「それ

への動き」なのである。では一体、何に依りうるのか。「日本に特有な言葉の意味に於ける人民戦線」の存立する根拠はどこにあるのか。

「人民戦線」という合言葉は最近のジャーナリストの空騒ぎにすぎぬ、という意見が、気の利いた又利いた風の、知恵として行なわれているようだが、それは多少当らぬでもない。併し人民戦線という言葉が、合言葉にさえなっているという一つの文化上の事実を之によって見過すことは許されない。人民戦線という言葉の魅力は、政治的にはまだその準備を完全になし得ていないと思わねばならぬ特殊事情にある日本では、相当観念的なものなのだ。だから駄目だというのではなくて、却ってそれ程之は文化上の、又文化運動上の、意義を有っていると云うのである。少なくともこの点を見落さぬものが日本のジャーナリストであったのであり、この点に比較的鈍感なのが日本の大衆政治家ではなかったかと思う。いうまでもなくファシズムの本質の一つはその巨大なデマゴギーの内に横たわる。反ファシヨ的な人民の戦線にとつてはこのデマゴギーに対する批判的で啓蒙的な文化上の意義は絶大なのだ。日本の人民戦線は之を文化運動上からも把握することが、特に必要なのである。」<sup>(8)</sup>

これで戸坂潤の人民戦線論は一巡する。他ならぬ「戦備的教養」に関わる「啓蒙」が、「日本に特有な言葉の意味に於ける人民戦線」の形成を正面任務として担うという循環——それにしても、何に依るのか。彼の「人民戦線」における敵・味方の像をもう一度一瞥しておこう。

彼の「人民戦線」の敵の像は、「思想善導」、「国民精神作興」および「国体明徴運動」という系列上には直接にはなく、「日本型ファシズム」

の合理的側面（近代的民衆常識の利用）において焦点を結ぶ。「啓蒙」が企図する常識水準における「交易」の、直接の対抗者としての像なのである。

「近衛内閣の思想政策上の功績は、従来の内閣の独善的思想統制の伝統を思い切って振りすてて、思想統制に著しい動員性を与えたことにあるのだ。この内閣の一種の好評は正にこれに類する聯明さにあるのである。日本型ファシズムの推進のためには絶対に不可欠な合法的仮面と近代的民衆常識の利用とを心得ていたことがその強みであろう。」<sup>(9)</sup>

彼の目は「近代的民衆常識」の帰趨に集中する。「思想善導」、「国民精神作興」、「国体明徴運動」の系列、即ち「思想統制」はたんに「統制」にすぎない。それは「統制」をなすだけで、「近代的民衆常識」を「動員」するだけの接着性を有っていない。戸坂の『思想と風俗』における風俗批評が「思想統制」に拮抗し、かつこれに優越するものと自負するものこの点にかかっていたのである。そして今や戸坂の「人民戦線」の向うに、彼が「動員性」を有つと警戒する敵が浮び上がっている。

「事実近衛内閣によって「国内相克」は多少とも緩和された。と云うことは不必要なイデオロギーが清算されて来たということである。日本型ファッション化にとって不必要なイデオロギーがだ。必要なのは「祭政一致」の提唱や反「自由主義」ではない。専ら「広義国防」という国防絶対至上主義と、根本的な反民主主義とである。つまり民主的な社会政策の代りに広義国防、デモクラシーの代りに政党改革（新党運動・選挙法改革等）、というわけなのである。かくて今日の日本の政治の目的はより

常識的に遂行されることになる。<sup>(10)</sup>

「常識的」とは何か、「動員」されてしまうと戸坂が警戒するのは誰のことか。「近代的民衆常識」——そこで戸坂潤の「人民戦線」が敷かれるはずの、——彼は「民衆」と呼ぶのではあるが。

「日本に於ける自由主義の意識は、甚だ不徹底な形に於てであるに拘らず、吾々の社会常識の基調をなして今日に及んでいる。ただそれが余りに常識化したものであったため、それから又、決して常識以上に抜け出なかつたために、特別に「自由主義」として意識的に自覚され強調されるような場合が、極めて例外な偶然の場合と見られるのに他ならない。日本主義が台頭するに当って、さし当り第一の目の敵としなければならなかつたのは、だから、この普及した社会常識としての自由主義思想だったのであって、之は別に、それまで自由主義の思想が特に意識的に旺盛を極めていたからではない。で、自由主義は無意識にしる近代日本の思想のかくされた基調をなしている。」<sup>(11)</sup>

「普及した社会常識としての自由主義思想」というのは、無限定にうけとれば如何にも奇矯という他ないか。しかし翻ってみれば、戸坂は別に「常識化したマルクス主義」ということを明言している。<sup>(12)</sup>つまり、件の「常識水準」の成層は、抽象的な思想の、層を成す水準というだけでなく、何か実体的な場面又は舞台を想定し、その限定された場面又は舞台においての「常識水準」ということでもあるようだ。とすれば、「普及した社会常識としての自由主義思想」というのは、かならずしも特に奇矯というべきではなく、従来の文化運動の射程距離の圈内においてと

いうむしろある程度実体的な像を浮び上らせもするだろう。戸坂はこれに待む。

「左翼潰滅」後の日本の文化運動は、必然的に文化的自由主義の原則を採用しなければならなかったが、併し今月までこの原則が社会的リアリティーを与える組織を有っていなかった。<sup>(13)</sup>

その組織が戸坂の「人民戦線」。しかし「常識水準」の成層はそのまま静止するものではない。戸坂の「文化的自由主義」との関係は例によってレトリカルな批判に示される。彼には、たんに「文化的自由主義」を待み、これに依拠することはできない。「弁証法的唯物論」が真の自由主義だ、という固陋な思想原理上の立場性からというだけではない。

「文化的自由主義」、この戸坂「人民戦線」の思想原則たるべきものそのものが急速に運動し、展開しつつあるのであるから。端的にいつて同時に急速に分解、つまり、もっとはっきり言えば壊走しつつあるのである。

だから戸坂の「文化自由主義」批判は、一見すると相反する両義性を表わしているようにみえる。つまり、「普及した社会常識としての自由主義思想」を待み、これに依るといつつ、同時に「一体自由主義が本当に独立した一個の思想として成り立つかどうか抑々の疑問なのである」というところから批判が展開することになる。結論ではない。そこから始まるのである。戸坂の眼前では、「文化的自由主義」は元来「日本主義」のさし当りの第一の敵とされなければならなかったはずであるのに、脆くも、否正しくはぶつかる前に自ら分解・展開・壊走して、逆に「日本主義の埒内に収容される」。戸坂はその過程をいくつか

の段階、位相を分けて絵解きのように示してみせる。『日本イデオロギ―論——現代日本に於ける日本主義・ファシズム・自由主義・思想の批判』の「序論」である「現代日本の思想上の諸問題——日本主義・自由主義・唯物論」(一九三五年)の集約が簡潔である。

自由主義——社会的政治的観念からの自由——文化的自由——宗教的意識への移行(宗教的な自由主義)——宗教的な「絶対主義」に転化——政治的「絶対主義」へ移行——日本主義。

同様に、哲学の位相では、自由主義哲学——「解釈の哲学」(現実の秩序でなく、意味の秩序)——文学主義的自由主義。「解釈哲学」からは、さらに文献学主義——復古主義——(国史への適用)——日本主義。

こうした戸坂の画く「文化的自由主義」の壊乱、壊走の過程が、実態に即しているものかどうか、とにかく戸坂は行き着く先は「日本主義」だと批判するのである。

しかし、戸坂は「文化的自由主義」を、この壊乱・壊走の過程ゆえを以て包括して断罪している、というのでもない。そうであればことは簡単だが、彼の「人民戦線」は成立する根拠を予め自ら喪失することにもなるのだ。

然り、彼は呼びかけているのである。眼前に壊乱、壊走していく「文化的自由主義」に、そしてその実体的な担い手に向って。

その行き着く先が「日本主義」に他ならないという暴露はあたかも絵解きする説教者の地獄絵のような脅しでもあろうか。しかし、この小稿の主題にとってより注視しなければならないのは、行き着く先の地獄絵

の方にではなく、戸坂が求めた彼の「人民戦線」の形姿の方にである。彼は何か具体的な像を示唆していたのであったから。——「常識化したマルクス主義」、そしてそれに領導される「普及した社会常識としての自由主義思想」、そしてさらにつけ加えれば、この二つの「常識水準」を媒介・「交易」する「啓蒙」。これは戸坂の単なる空想的な理念型ではないといつてよい。つまり、何か史的な実体が、およそ現在のには壊乱・壊走しつつあるとはいえ、なお戸坂にとっては待むべきぎりぎりの実体としてそこにあるかのように提示されるのだ。正確にいえばその維持が、戸坂の「人民戦線」戦術そのものを成すといえようか。——彼のいう「理論的ジャーナリズム」、平たくいえば所謂総合雑誌「公共圏」の史的形姿が、それである。

註

(1) 戸坂潤の「文学論」について、その位置づけを試みた香内三郎「戸坂潤における「文学論」の位置」〔季刊ジャーナリズム論史研究〕No. 7、一九七七年)は、従来の諸評価を要約、列挙している。——(a)「人民戦線」的言論活動としての評価、(b)「思想」、「方法」としてのマルクス主義の擁護という評価、(c)三〇年代後半において、権力の強圧によるとはいえ、なぜ「日本的」「民族的」イデオロギーに大衆をとられていくのかの解明として。あるいは特殊的には、「転向」の思想反省的考察。——それぞれの相互の重なり合い、複合・重層するのは前提で、一応分析する目安ということであろう。香内論文は従来の、なぜ「文学・道徳論」だったのかという問題への解答の分布を、一応このように分析したあと、より端的に戸坂の「文学論」そのものを検討しようというものである。それら従来の評価では戸坂の心象風景が大きな要素になりすぎ、いわば、答えの中に問いがそのまま「入れ子」になって入り込んでしまっているという隘路を指摘する

点では、本稿の接近方法と共通であるともいえる。つまり、戸坂潤の言論の方法と効用意識といつても、心象風景や心事の推定又は再現をそれとして試みようとしたり、それを根拠に説明を築こうというのではなく、「啓蒙」論の理論的大枠を前提として、より客観的な言論様式の位相でこの問題を追求していこうというのが本稿の主題である。そしてこの章では、それを「戦備」の前線化という特性において検討しようというのである。

(2) 「所謂「人民戦線」の問題」(一九三六年、『世界の一環としての日本』所収)『戸坂潤全集』第五卷五三頁。

(3) 第二インターナショナルのマルクス主義(社会民主主義と自称する)からコミンテルンのマルクス主義が訣別、自立するイデオロギー的な諸々の試みは、結局スターリンの「レーニン主義」諸教科書、たとえば『レーニン主義の基礎』に帰す。コミンテルンの「世界革命」の理念にとって、ヨーロッパ・プロレタリアートの大分裂、就中コミンテルンへの敵対との対処は少なくとも当初においては意外な「裏切り」であり、また最後まで、「謎」でありつづけた。J・デグラス『コミンテルン・ドキュメント』にみられる統一戦線論の振幅の系譜などや、『第二インターナショナルの革命論争』、『第三インターナショナルとヨーロッパ革命』(いずれも『マルクス主義革命論史』紀伊國屋書店2巻、3巻)など参照。

(4) (2)に同じ。『戸坂潤全集』第五卷五四頁。

(5) 同前、五四―五五頁。

(6) 「社大党はファッショ化したか?」(一九三七年、『世界の一環としての日本』所収)『戸坂潤全集』第五卷二二三頁。

(7) 合法無産政党が戦争とファシズムにのみ込まれる過程に関して増島宏・高橋彦博・大野節子『無産政党の研究——戦前日本の社会民主主義——』参照。社会民主主義といつても、第二インターナショナル以来の史的系譜の上のヨーロッパ社会民主主義とはその基盤が大きく異なるが。

(8) (2)に同じ。『戸坂潤全集』第五卷五五頁。

(9) 「思想動員論」〔日本評論〕一九三七年九月号、『世界の一環としての日

本』所収)『戸坂潤全集』第五卷一九二頁。

(10) 「近衛内閣の常識性」(『日本評論』一九三七年七月号、『世界の一環としての日本』所収)『戸坂潤全集』第五卷一八七—一八頁。

(11) 「現代日本の思想上の諸問題」(一九三五年、『日本イデオロギー論』「序論」所収)『戸坂潤全集』第二卷二二七—二八頁。

(12) 「現代唯物論と文化問題」(一九三六年、『現代唯物論講話』所収)、「現代日本のヒューマニズムと唯物論」(『唯物論研究』一九三七頁、五二号)、『世界の一環としての日本』所収)など参照。

(13) 「現下の文化運動」(『改造』一九三六年八月号、『現代唯物論講話』所収)『戸坂潤全集』第三卷三八四頁。

### 三、「理論的ジャーナリズム」

#### ——史的系譜の素描

一九三一年であるから、これまで見てきた戸坂の著述には相当先行するものであるが、京都でのアカデミック・キャリアを全部放棄し上京、三木清のあとをうけて法政大学講師になる、という時期に執筆された「アカデミーとジャーナリズム」(『思想』一一一頁)という小論文がある。「アカデミーとジャーナリズムとは全く相反した二つの態度である。両者は、事物に対する人々の意識的・観念的・イデオロギー的活動の、ありべき二つの態度である」という文脈で引照されることが多いが、ここではより実体的な位相で戸坂の言論の舞台をみてみよう。戸坂の視野はさしあたり、互いに空々しい自己独立性を保つ帝国大学と文壇というところからひろがる。

「我国に於て、ジャーナリズムが最も目立って支配的であったのは、始め主として文芸の領域に於てであった。そこでは夙く文壇なるものが形成されたが、之に対立したものは文壇外の個々の優れた作家であつて、決して文芸のアカデミーではなかつた。之に反してアカデミーが最も目立って支配的であつたのは、当然のことながら、初めから主として科学——哲学の領域に於てであつた。そこではすでに帝国大学が建設されてあつたが、科学的・哲学的諸理論の研究に就いて、これと太力打ちするのはジャーナリズムの柄ではなかつたのである。そして帝国大学と文壇とが、このアカデミーの主体とジャーナリズムの主体とが、互いに空々しい自己独立性を保っていた限り、アカデミーとジャーナリズムとの連関が、正常な視角から取り上げられ得なかつたのは必然である。大学の本質の変化と文壇の構造の変化(私大昇格・諸大学の反動化と左翼文壇の形成)、これら一切の其の後変化に拘らず、出発点に於けるアカデミーとジャーナリズムとのこの冷淡な関係は、近来にまでその影響を強く止めている<sup>(1)</sup>」。

そして戸坂は宣言する。「世間で所謂、「大学の転落」と呼ぶ一つの現象」とは、「理論的ジャーナリズム」の勃興、確立に他ならない、と。

「諸大学は或る種の教授助教授を学園から街頭へ投げ出すことによつて、知らず知らず——実は意識的でもあつたのだが、——アカデミーに對立する一つの理論的実勢力、理論的ジャーナリズムを造り出したのである。そこでは理論がアカデミー的ではなくてジャーナリズム的に取扱われ、事物のジャーナリズム的理論が、そのアカデミー的理論と質的に

対立することになった。アカデミーは今や、之まで慣れて来たその權威や尊嚴を無視され、自己の業績をジャーナリズムによって縦横に批判・評価される運命にさえ立ち至った。而もこの理論的ジャーナリズムは、元来ジャーナリズムの唯一の動力でさえあつた出版資本の諸天才によつて、云わば紙上のインターカレッジの形を与えられて、愈々その勢力の量的範圍を拡大した。今やアカデミーは、その質に於ては自己の反対物を、その量に於ては自己の対立物を、この理論的ジャーナリズムの内に見ねばならなくなった。<sup>(2)</sup>

「雑誌 学問<sup>ジャーナリズム</sup>」という言い方が平明だろう。「出版資本の諸天才」たる滝田樗陰や山本実彦によつて成長定着せしめられた『中央公論』、『改造』などの総合雑誌群。民本主義、社会主義思想の商品化の成功。ともかく戸坂の「理論的ジャーナリズム」に対する評価は、奇妙なほど明朗である。いや、その実態との対比は後で問題としよう。彼の明朗な評価をもう少しみておく。

「事実、吾が国の大学は、それが国家機関である限り多分に封建的、契機を含んでいる。之に反して出版資本は代表的に、純粹に、資本主義的であるだろう。だからアカデミーとジャーナリズムとの連関は、現代の資本主義社会に於ける封建的契機と資本制的契機との錯綜的連関の一つの場合に相当するものなのである。人々はこの二つの契機の内どれが能動的で、どれが受動的であるかをすでに知っている。現在のアカデミーは、夫がもつ歴史的諸契機の規定が、すでに行く処まで行き着きつつある、夫は略々残る処なく頭われて了っている。処が今之に続こうとして

いるジャーナリズムは、まだその歴史的諸契機が充分にほぐされる処まで客観的に来ていない。ジャーナリズムはその一般的な本質が決定されてもなお、様々な方向への可能性を實際に含んでいる。之は云わばイデオロギー的活動の前衛の暫定的な共同戦線地帯であるとも云えるだろう。實際つい最近までは、ブルジョア・ジャーナリズムの一遇には、プロレタリア・ジャーナリズムも発生出来る余地が余されていたかのように見える。この共同戦線はどのように整理されて行くか、又行かねばならぬか。と云うのは、外でもない、現在のこの歪められたアカデミーとジャーナリズムとを、本来のアカデミーとジャーナリズムとに立て直し、それが本来持つことの出来る筈であつた社会的機能を滞ることなく發揮させるために、ジャーナリズムに対して、吾々は何をなすべきであるか。——之は一等手近かな問題である。と共に又最後の問題である。<sup>(3)</sup>

ところで、戸坂の「理論的ジャーナリズム」は、「大学の転落」を史的契機としていた。しかし、ここでいう総合雑誌「公共圏」の史的契機はそれだけにとどまるまい。その歴史的な系譜からみれば、むしろそれは結果であつて、初発の史的契機は「大学の普及」に他ならず、かつこれが基調となるというべきである。この点を確にみておかないと、戸坂の清朗さにそのままつき合うことになる。基礎に高等教養、就中政治的教養を求める大きな潮の勃興があり、その基盤の上で、大学は「普及」もし、又「転落」もするが、そのいずれも、そのこと自体では思想上のヘゲモニー争いで有利・不利の現われとは速断できがたいこと。そのことに注意しなければならない。

明治の徳富蘇峰『国民之友』はここでは措くが、戸坂が眼前にしている総合雑誌群の嚆矢であり支柱の一つである『中央公論』と吉野作造の関係をみてみれば良い。<sup>(4)</sup>

吉野作造の民本主義的言論が、滝田樗陰との出会い（樗陰の方からは出会いというより目利き、というべきであろうが）により、『中央公論』をあたかも機関誌のごとくにして展開されたということは周知のことである。そして、少なくとも吉野の側においては、その民本主義的言論は『中央公論』という舞台を得る以前から起動し連続する目的意識的・系統的なものであった。彼が一九一五年に少数の学者と組織した「大学普及会」及びその機関誌『国民講壇』のことである。<sup>(5)</sup>これが端的に範型を示す。

「大学普及会」は、ケンブリッジ大学で一九世紀後半に始められたという University Extension に範をとったもので、高等教養の普及をめぐる激しい階級的ヘゲモニー争いの内、上からの普及を代表する。イギリスでのコンテキストは別にしても、吉野作造の史的意識は第一次世界大戦の渦中に不可避的な「民衆政治」の抬頭を見、あるいは予見し、高等教養、就中政治的教養の普及における激的な階級的ヘゲモニー争いに早くから本格的に身構えているのである。<sup>(6)</sup>「民衆政治」で貴族政治と云ふ方面がなければ、之も亦駄目である」というイギリス保守主義風の「民衆的示威運動を論ず」など想起することもよい。が、その基礎として、新たに高等教養を求める広汎な勢力の勃興をはっきりと見てとり、そこでの主導権争いが一大決戦場であると決意している吉野作造の史的意識の鮮明さ、国家意識の強固さをまず確かに検認しておくべきである。

う。<sup>(7)</sup>

この吉野作造が目的意識的な言論としてとりあえず企図、実行したのが「大学普及会」・『国民講壇』であり、それはまさに、「大学の普及」に他ならなかったのである。そして「大学普及会」・『国民講壇』そのものは一年に満たず消滅するが、その筋目を目利きし、『中央公論』に結びつけたのが「出版資本の諸天才」の一方の雄、滝田樗陰に他ならない。このことにより『中央公論』そのものも大正デモクラシーを通じて民本主義的言論の中心になり、総合雑誌としての地位を飛躍させる。<sup>(8)</sup>「出版資本の諸天才」の由縁である。

吉野の『国民講壇』創刊号に掲げられた「特色の一」にはこうある。

「開放されたる自由国民大学（誰でも這入れる!!）活動の国民たるものは、何人も日維れ新たな知識の空気に触れて、一日一刻も活素養を怠らぬやうに努めねばならぬ。何よりもその必要の理由は、今回の戦争で独逸があれだけ強いのを看ればわかる。されば西洋諸国には「大<sup>ユニバーシティ、大学</sup>伸<sup>ニバーシティ、大学</sup>張」とか「家庭<sup>ホーム・ユニバーシティ</sup>大学」とか名づけて、講演に著書にいろいろと国民自修の立派な機関が具はつてゐる。然るに我國民の度には今日まで一種の迷信があつて、学問の出来る処は校舎の形を備えた大学や専門学校ばかりだと思ひ込んでいる。この由由敷弊風を除き、知識階級の國民に最も活きた、そして最も自由な教養の資料を供給しようとするのが本会の主要目的である。されば斯の会の性質は、一言にして謂へば、開放されたる「自由大学」である。また何ものにも拘束されない國民各自の

「無形大学」である。或いは其の意味の「国民大学」である。我等の自由大学を祝せよ、なぜなら、此処に我等は教師と生徒との区別を認めず、何人も出入自在であって、真の知識の故郷、活動の策源地たるのであるから。」

ここが主戦場だ、というのである。そして滝田樗陰の『中央公論』と結合した吉野作造の民本主義的言論は、破竹の勢いで総合雑誌「公共圏」を席捲、というよりむしろ闘う開拓者としてその基盤の拡大と共に、版図を拡げていく、かみえた。

ところが実際は、吉野作造の予見又は危惧はあまりにも的中しすぎた、というべきである。——彼の民本主義の対抗者である、後発の広い意味でのコミンテルン・マルクス主義の大思潮が、一九二〇年代に入って、「山川イズム」、「福本イズム」あるいは、「三木哲学」などとして幾波にもわたって急迫することになるのだ。もっとも、「出版資本の諸天才」たる滝田樗陰、山本実彦等は、このコミンテルン・マルクス主義の幾波にもわたる大思潮の中で、之を自己の総合雑誌の基盤づくりに資することに巧みに成功するのであるが。

こうした民本主義とコミンテルン・マルクス主義の思想としての奇妙な重畳関係をとくに典型的にあらわしているものは、新人会の軌跡である(9)。

東大法学部教授吉野作造の下に集まった普選研究会の学生メンバーが中心となり、一九一八年に結成された新人会。指導理念は当初の民本主義から、数年のうちにたちまち広義の社会主義に変じ、さらにそれがコ

ミンテルン・マルクス主義に成る。波状的な時代思潮のめまぐるしさが、学生メンバーという、構成員の特性によって一層めまぐるしくなったというべきか。新人会の実行した学生の出身高校別読書会(所謂RS)をみよう。国家の高等教育制度の体系がそのまま、思潮を伝播増幅するチャンネルになるという局面。

学連の中核としての新人会は、一時期、「福本主義」の時期だが、東大生の一割近くを吸収し、少くとも学生の中ではコミンテルン・マルクス主義の知的ヘゲモニーが樹立されるに至る。学部別講義より知的権威を有するものとされた「社研」のカリキュラム——「学連研究コース」を想起すればよい。(10)

少なくとも学生の内におけるコミンテルン・マルクス主義の知的ヘゲモニーの確立——実際はその直後から一気に過酷な試練が始まるのだが——民本主義とコミンテルン・マルクス主義の奇妙な思想的な重畳関係をこういう流れで追ってくると、先に述べた戸坂の「大学の転落」とようやくある程度脈絡がつながる。吉野の「大学普及」が重畳的な展開の過程でその内容を変容させ戸坂のいう「大学の転落」にさらに反転していくわけなのだ。

戸坂における「理論的ジャーナリズム」、平たくいえば総合雑誌「公共圏」の史的形姿は、こうした思想的重畳を折りたたんで内蔵しているのである。前章でみたようなやや奇矯な表現である「常識化したマルクス主義」ということ、そしてそれに領導される「普及した社会常識としての自由主義思想」ということも、こうした史的形姿との対応をみて、



ようやく一応は判然とするのである。

一応は判然とする。——しかし、すぐに問わねばなるまい。——戸坂の「人民戦線」の実体的な形姿たるこの「理論的ジャーナリズム」の「公共圏」は、実際には彼の眼前ですでに壊乱しつつあったのではないか。壊乱しつつあるからこそ、その維持が戸坂の「人民戦線」戦術の実際内容であるということか。<sup>(1)</sup>しかし、戸坂においては「理論的ジャーナリズム」は、これまで見てきたようにその内実、コミンテルン・マルクス主義の知的ヘゲモニーが蔽存するがゆえの「理論的ジャーナリズム」であつたらう。又だからこそ戸坂が、「殿軍」としてそのヘゲモニーを掌握しつづけようと苦闘した、いや現に掌握したということなのか。

戸坂はその限りまさしく「殿軍」として、是非もない「戦備」の前線化の中で堂々敢闘しきつたというべきであろう。一九三七年末執筆禁止を命ぜられ沈黙せしめられ、さらに唯研が解散せしめられた後も、伊藤書店の出版企画に参与、徒手空拳というべき条件の中でも思想表現活動を敢行しつづけようとしたのである。——否々、元々ここでそうしたことを改めて問うてみようというのでは、更になかった。逆だ。本来、戸坂を、この人物と思想を、支援・擁護するはずの、彼が敢えて諭える「人民戦線」Ⅱ「理論的ジャーナリズム」、それが独自の「戦線」たりうる史的根拠を、果してなお有していたのか、それを問わねばなるまいというのである。このかぎり、戸坂が「理論的ジャーナリズム」を論ずる際の清朗さには、判然としきれぬところがあるのだ。

ジャーナリズムと政治的文化活動の親和の歴史が明晰な方法・効用意

識によって顧みられるとき、時はすでに黄昏であつた。しかし、その史的根拠についてさらに述べることは、この小稿の範囲をこえている。

#### 註

- (1) 「アカデミーとジャーナリズム」(『思想』一九三二年、一一一―一四六頁、『現代哲学講話』所収)、『戸坂潤全集』第三卷一四五頁。
- (2) 同前、一四六頁。
- (3) 同前、一五三頁。
- (4) 吉野作造における「理論的ジャーナリズム」の初発においては、二拙稿がある。「理論的ジャーナリズムと社会主義的啓蒙」(『東京大学新聞研究』所収) No. 25、一九三七年、「吉野作造の史的意識と言論——理論的ジャーナリズムの初発の形態」(『季刊ジャーナリズム論史研究』No. 5)。
- (5) 嘉治隆一「民本主義前後(上)」(『批判』一九三三年五月号)に「大学普及会」のことがでてゐる。「故吉野博士によって所謂民本主義が社会的に提唱せられたのは何時頃のことであつたらうか。普通には大正五年一月の中央公論に現われた博士の論文「憲政の本義を説いて其の有終の美を為すの道を論ず」に始まるとせられているやうであるが、当時の事情に精通する先輩の話によれば、やはりその前年に大学普及会の名によって公刊せられた「国民講壇」に遡る可きだといふことである。この年代の点はどちらにしても半年か一年の相異で大したことはないやうであるが、然し、「大学普及会」といふ一つの仕事は官学関係者が街頭に出やうとした試みの一つとして歴史的に記憶せらるべき事実であると思はれるから、この機会に改めて記録に止めておこうと思ふ。——正しく、民本主義的評論の初出の所載如何ということではなく、吉野の言論の造出過程の中にその言論と言論様式の特徴、就中方法・効用意識の特性がより鮮明に示されているといふことにおいて、「大学普及会」の活動が重要なのだ。
- (6) (4)に挙げた二拙稿で、吉野作造の第一次世界大戦論、ロシア革命論、民衆運動論を検討し、その史的意識を追っている。これと彼の政治学・国

家学とが組合って、そこからジャーナリズム活動の広い意味での戦略性が規定されているのである。

吉野作造の史的意識の両義性については、彼自身が強く引照するヘーゲルの『法の哲学』における史的意識が参考になる。両義性というのは、K・レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』やそれを継承するM・リーデル『ヘーゲル法哲学』で強調されるそれである。

就中「教養 (Bildung)」の意義については次の拙稿が詳しい。「ジャーナリズム論史研究序説」(『季刊ジャーナリズム論史研究』No. 8~12)

(7) 時期は後になるが、簡潔にまとめたものとして「国家生活の一新」(『中央公論』一九二〇年一月号)、「政治学の革新」(同号)など参照。

(8) 滝田樗陰や直接執筆していた『中央公論』の「社論」から、吉野作造の「社論」への切り換えは、「社論」執筆者としての樗陰の退場であるが、編集者としての目利きの良さを証拠づけることでもある。評論の主題は中国革命論だが、この切り換えを扱った拙稿に、「吉野作造の言論の型——『中央公論』に於る辛亥革命論の「弁証法」——」(『社会運動史』No. 5、No. 6)がある。

(9) 新人会についての論述は多いが、ここでは、新人会創立五〇周年を機縁として刊行されている石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録——現代思想史の源流を創る』(経済往来社) 参照。当時の学生メンバーの回顧が編集されている。

(10) 同前、「資料篇」にテキスト、参考書付きの「昭和二年度学連研究コース」が載せられている。

(11) 戸坂のいう「理論的ジャーナリズム」、総合雑誌「公共圏」の壊乱の過程について、上野征洋「戦時下の言論と総合雑誌——『自由』にみる昭和一一年〜一三年——」(『季刊ジャーナリズム論史研究』No. 2~No. 9)が総合雑誌の側からまとまった叙述をなしている。「改造」、「中央公論」という総合雑誌群の壊乱の中で、とくに興味深いのは、著者がとくに取り上げる『自由』の奮闘と壊滅の過程である。伊東伯爵家の若い当主たる伊東治

正の主宰という、経済的にも政治的にも一般の商業ジャーナリズムとは異なる境位で成立しているのであるが、かえって理念型としての総合雑誌を一九三七年という時期に敢えて作爲的に実現させてみせるところが注目させる。著者も指摘する通り、執筆陣でみれば、『改造』、『日本評論』より戦闘的などところに位置づくだろう。『自由』は「第一次人民戦線事件」、「第二次人民戦線事件」を直接の要因として自ら廃刊する。「結局、『自由』がこの時期に廃刊したことは、メディアもまた「へ」の転向を拒否したものとみることが出来る。」(同前、No. 9)のであるが、他の総合雑誌群がその後も存続しつづけるところに正しく内実における壊乱の深甚さが透し見えるということなのである。抵抗の形姿というより、壊乱の指標。